

寒地における 苺栽培の注意点

北海道農業試験場

花 岡 保

寒地の苺栽培の要点につき、とくに北海道の札幌地方を中心にしてみたい。

寒地では東北地方などの冷涼地とともに、苺は永年栽培という本州の暖地とは異なる栽培様式で以前から栽培が行なわれてきた。これは欧米の北部でもみられる作型であり、本道の農家の経営面積が比較的広いこと、水田裏作に組入れられないこと、寒地向苺の品種特性の特異性、など多くの要因が関係していると考えられる。

病虫害に未知の分野が多く、ただに輪作に対する考慮すら薄らぎ、古くからの永年栽培を行なってきた有名な生産地は収量品質ともに低下し、廃耕あるいは減反の生産地も相当にみられ、現在の主要な生産地も近い将来は同じ傾向をたどる様相が散見される。他方地方都市の発展や交通事情の好転とともに、新産地が消費の増加にともない要求され、新産地も都心から相当距離の地帯に伸びつつあるようである。

さて苺はビタミン類も多量に含まれ、果実の女王といわれるほどに消費層が増大し、青果物の中では市場の取扱金額では、ミニカン、リンゴ、夏ミカン、バナナなどに次いで需要が多く、栗、桃、ブドウ、西瓜などを上まわる傾向にあります。札幌中央卸売市場でもここ数年間の価格はあまり値下りがなく、消費者が増大してより多量の生産ならびに出荷を期待する声が高い。農家にとっても比較的、資材、労力ともに収穫、調製を除いては手がかからず、早くから現金収入が得られるなど、有利なそ菜といえましょ

1 品種について

従来二〇〇以上の苺の品種や系統を手がけてきたが、外国からの導入直後や、交配実生の育成初めには草勢が強く、良質、多

年遅いものは六、七年くらいで同一の品種と思われるほど退化（弱勢化）を示す例が観察できます。これはウイルス病、線虫類（ネマトーダ類）、根腐病などによる単独または重複被害の結果と見なされることが、最近明らかになりつたり、品種の選定に、以上のようない病、害虫に被害のない苗株を用いることがまず前提の条件となることを念頭に入れておく必要があると思う。

以上の点から品種を考えると、普通の露地用の品種として、大果、美味、外観の美しさ、適度の硬さをもち日持よく輸送に使える、退化が遅い、多収で収穫後半でも粒が大きいなどの諸点を総合して、オランダから導入した「ジャスペ」、「ホレラ」の二品種が卓越しており、国内交配種として「盛岡一六号」、「盛岡一七号」、アメリカで育成された「ボカボンタス」、「プロンテナク」などがよく、またウイルス病を除いた「幸玉」もよく、またマルチとトンネル被覆、灌水を行なう場合の「ダナー」などの利用も大いに著目する必要があろうかと思われます。なお「盛岡系統」はまだ系統の段階なので一日も早く優良品種として決定されることが切望される。「東北八・十五号」は九号が多収であるが、何れも一長一短があり、前記二系統の方が優良のように観察されます。なお「ジャスペ」、「ホレラ」に

ついては現在線虫の寄生のない株を養成中であるが、何分にも手数を要するので、苗数が増えるまでにはなお年数を要すると思われる。

2 育 苗

従来、苺の育苗は寒地では畦間を広めにとり、畦間に発生したランナーマイを植え込む簡易育苗が主であったが、線虫の密度を少なくしてその被害をおさえるためには、隔離育苗圃を今迄に苺を栽培したことのない圃場とか線虫の少ない水田跡地などに選定して、健苗を増殖する必要がある。

つぎに親株の選定は毎年収穫用圃場が輪作でくる形式に計画して（二、三年更新を主体とする）、できるだけ無病株を導入し、あるいは草勢、葉形、葉色のよい強勢の多収株を選定し、前年秋の時期に予めクロールピクリンかDDなどの土壤消毒剤を三〇坪間隔に三CCずつ土中一〇~一五cmの深さに注入し、上はポリエチレンフィルムで約三~四週間くん蒸する。くん蒸消毒された土は耕耘機で充分耘転しガス抜きし、幅一二〇cm前後の幅に短ざく形の育苗圃を作り、養成したランナーマイを二五穴の方形に植えていく。なお消毒剤であるが根腐病（レッドステール病、根腐れ線虫ではない）の発生する圃場はクロールピクリンが有効であるが、線虫害のみの甚しい圃場はDD価なのでこの方がよい。床場の施肥は三、三平方メートル当たり堆肥一〇キロ、硫安一〇キロ、過石二〇〇キロ、カリ五〇キロを成畦前に全面に二〇秀筋の深さによく混合して施用する。

ランナーは六月中旬頃から八月中まで順

時発生するが、早いものから順時早目に採苗して床場に定植するが、二株当たり一均ぐらのエカチン粒剤、デブテレックスなどを植孔に入れると、アブラムシその他の害虫に効果がある。仮植後充分灌水し、三〇〇番の黒の寒れいしゃをトンネルに覆し、夏の暑さと、日照の直射を防ぐと活着や虫害の防除に効果が大きい。灌水は降雨、土壤湿度、苗の状況などにらみ合わせ常に行なうよう、できれば適当な灌水施設を設けることが希ましい。

健全苗の導入、養成については先にも少しふれたが、馬鈴薯の採種体系と同様に、苺関係者は原種農場、農協、種苗業界、耕作組合など一貫した健苗増殖の体系化が今後考慮されなければ、消費費に対応する生産地の優品の生産は望み難いと思われる。

アメリカなどでは一貫した増植体系が有機的に活動していると聞いているが、うらやましいかぎりである。

3 栽培方法

1 輪作 苺は二~四年の永年栽培が普通であるが、今まで輪作についてあまり留意されていなかった。しかし前述の病害を考えると、長期的な計画のもとに輪作を考え、禾本科作物、豆科作物などを組入れることが肝要である。アスパラガスや水田の後作は線虫が少なくなるといわれているから、これらも考える必要がある。

2 施肥 苺は種々の病害があるが、育苗、施肥、その他の栽培法を総合的に改善すると被害は軽減し、収量と品質は向上する。

施肥は畑の間に応じて石灰を施し、また

堆肥や鶏糞など有機質肥料を充分施す。

肥料は速効性と遲効性肥料を適宜併用す

る。私はアスペラガス肥料「七〇四」を一年苗に五袋(一袋二〇キロ入り、一〇坪当り、窒素一七キロ、リンサン一〇キロ、カリ一四キロ)を秋七割、春三割の割で施し効果は大きい。

二年苗は七月収穫直後に六割、秋九月十日までに二割、春二割の率で一年苗の二割増べの量を用いる。土性によってはリンサン量をさらに加量するとか、鶏糞量の多い場合は化学肥料を減らすこともある。

3 定植 病害のない育苗床で育成した苺苗は八月あるいは遅くとも九月上旬中に定植されねばならない。八月の暑い時候でもあり、活著率をよくするため早く出たランナを育苗して、葉数が多く充分根の張った健苗を用いるほか、雨後で土湿のある時期を逃がさず植え込むがよい。経営面積の広い場合は畦幅一尺、株間三〇~二五歩として農機具の入ることを考え、また二畦間約四〇~五〇歩の二畦の抱畠にすると株数が増える。手で植孔を作り深からず浅からず植えこむが、深植よりは浅植の方が後で僅かに培土すればすむので浅植の方がよい。なお施肥が秋植え時ならば「浸透性殺虫粒剤」を使用し、アブラムシの防除(もちろん有機燃焼剤の散布はするが)に努めるがよい。薬剤の毒性は前記の夏期の定植なら、翌年の収穫期までに相当長い期間があるので、収穫果は全く関係しないと思われる。

6 敷わらと収穫

露地栽培では、果実の花芽は頂花房で、花蕾の形成と発達の頂花房では九月十日から二十五日ころまでの間にでき始め、第二小花、第三小花、な

らびに頂花房から腋花房(第二、第三花房)

へと分化が進み、根雪直前まである株は

がく片形成後花冠形成が行なわれ、さらに

ある苗はさらに花芽が進んで雄ずい形成に達したものを見られる。積雪後、融雪の時期まで雪の下では花芽の発達や形成は行なわれず、春融雪後は、暖気と長日長のもので、花蕾の出現、開花、結実と発達が進んでゆく。他の果菜類のように生育とともに順時花芽が出来上ってゆくのと異なり、今年咲く花は前年秋九月十日すぎになるとどの株も一様に花芽が準備されるわけである。

5 中耕、除草など 一年生苗と二年生苗については前に述べたが、これらはランナー整理除去、中耕、除草などの作業と関連させて行なうことができる。除草は株と株の間は手取りで入念に行ない、畦間は肥料を散布して、耕耘機でよく中耕、混和するがよい。春夏とも除草後、シマジン(CA T)を一〇坪当り八〇~一二〇坪ぐらい適量の水でうすめて畦間処理すればほとんど害はない。除草剤としてはこのほかレンザーなどがよく、ともに薬害は少ない方に属すると言えられる。

4 病虫害の防除

病虫害のうち、線虫、ウイルス病、根腐病などについては、優良苗の導入、隔離増殖、育苗の入念な管理などの必要性を前に述べた。これらのほか灰色かび病は高温、多湿のとき果面にカビを生じ品質を悪くさせるが、トリアジンやダイセンの五〇〇~六〇〇倍液か、オーソサイド三〇〇~四〇〇倍液を五月始めころから散布すれば効果的であるが、幼果が著生し始める頃はダイセンステーンレスを最後に散布を終り

間全面にも敷わらをする。その時期は開花盛期すぎ、前後が多いが、敷わら材料に稻わらを用いるときは、最近そさい類の生育に生育障害を起こすといわれる農薬を使用していいない稻藁を使用したい。また地温をあげて成熟期を早めるためにはボリマルチ

も効果的であるが、この場合は畦をやや高めにし、予め畦間をマルチ幅に合わせて低くすることが大切である。なおマルチの場合、畦間に向け傾斜をつけ降水の後で水のたまらぬように凹凸なく整地する。